

農作業安全についてのアンケート結果報告

1. アンケートの目的

農作業死亡事故は毎年 300 件近く発生しており、就業人口 10 万人当たりの発生件数は全産業平均の約 13 倍にも達し、農業は日本における代表的な危険産業のひとつとなっている。これに鑑みて農林水産省では、農林水産業・食品産業の作業安全のための規範（共通規範）を策定し、労働安全対策の更なる推進を図ろうとしており、農業現場では、今後この規範に沿って具体的な労働安全対策が策定・実践されることが望まれている。

また、農作業死亡事故の 7 割が農業機械の使用中に発生していることから、農業者や農業経営者の日頃の安全対策に加え、より安全性の高い農業機械の導入の拡大や、安全性の高い使用法の普及が望まれている。特に、より安全性の高い農業機械の導入の拡大を図るため、農業機械の安全機能や要件を確認・評価するための制度として、安全性検査が行われているが、その認知度は低いなどの課題がある。

そこで、今後、優先して安全対策の啓発や研究・開発に取り組むべき課題や安全性検査のあり方を明らかにするため、農業法人の農作業安全に対する考えや日頃の取組状況、安全性検査の認知度等について、公益社団法人日本農業法人協会と農研機構農業機械研究部門が共同でアンケート調査を行った。

2. アンケート方法

- 実施期間は、令和3年7月5日から8月31日。
- 対象者は日本農業法人協会の会員である農業法人（全国約2,000件）とし、FAXまたはWebフォームに回答していただくこととした。
- 回答はExcel形式で整理し、農機研で集計と分析を行った。
- 質問内容は、日頃、農作業安全に関して農場で取り組んでいる内容の有無と安全性検査への認知度の二部構成とした。農作業安全の取り組みとして各設問に挙げた選択肢は、農林水産省の「農作業安全に関する指針」に記されている項目に準じた。
- 回答数は87件、回収率は4.4%であった。

3. アンケート集計結果

回収した数が87件と少なかった反面、長いアンケートであるにもかかわらず、すべて最後の設問まで回答されていた。また、「GAP認証を取得している、あるいは取得中」との回答は41.4%、「BCPを設定している」との回答は19.5%であったことから、回答者は安全に対する関心が高い層であることがうかがわれた。なお、GAP認証とBCP設定の両方を回答した法人は9.2%だった。

以下に各問に対する回答状況を整理する。

問1. 安全管理に関して、農場で取り組んでいることについて、該当するもの全てを選択してください。

1) 研修や教育、免許や認証について（複数回答可）

回答数 87

①自治体やJA等が開催する農作業安全研修会に参加している	39.1%
②必要な資格の取得や特別教育、安全教育の受講を義務づけている	37.9%
③従業員に安全のために必要な事柄について教育を行っている	57.5%
④大型特殊自動車及び作業機をけん引するトラクターに乗るスタッフは、大特免許を持っている	66.7%
⑤GAPの認証を受けている、又は認証に向けて取り組んでいる	41.4%
⑥その他	3.4%

「その他」の内容

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・農場 HACCP 取得中・特別に何もしていない・SQF (Safe Quality Food : HACCP に基づく国際認証規格) を認証取得している |
|---|

- 「①自治体やJA等が開催する農作業安全研修会への参加」が約4割を占めていることから、こうした研修会の内容の充実化と頻度の向上が必要と考えられた。それは57.5%を占める「③従業員への教育」の内容にもこうした研修で得た情報が反映されるであろうことから重要である。
- 「④大特免許」については、最も多くを占めていたが、6割台にとどまった。これは該当しないケースも含まれているためと考えられた。
- 「⑤GAP認証を取得済みあるいは取得中」が41.4%と高い実施率であった。さらに、この後の5)で「BCPを設定している」も実施している回答者は9.2%であった。

2) 習慣・ルールについて (複数回答可)

回答数 87

①作業前又は後に、その日の出勤者 <u>全員</u> でミーティングを行っている	58.6%
②必ず毎日、作業日報を書くことにしている	67.8%
③作業の安全を管理する担当者を決めている	39.1%
④安全関係に限らず、どんなささいなことでも気づいたことは報告するようにしている	66.7%
⑤未熟練の作業員には、必ず熟練者のサポートを付けている	54.0%
⑥危険度の高い作業は一人で行わず、必ず複数人で行っている	66.7%
⑦携帯電話を所持して作業している	92.0%
⑧組作業を行うときの合図を決めており、お互いに合図を確認してから次の動作を行っている	14.9%
⑨安全に配慮した作業方法・手順を定め、 <u>全員</u> で実践している	56.3%
⑩その他	0%

- 「⑦携帯電話の所持」が9割を超えた反面、「⑧組作業を行う際の取り決め」については14.9%と、組作業が行われないケースがあることを踏まえても低い実施率だった。
- 労働安全衛生法では、常時50人以上の従業員を雇用する事業場への安全管理責任者の設置が義務づけられている。そのような規模の農業法人は限られていると思われるが、約4割が「③安全を管理する担当者を決めている」に回答した。この回答者からは、安全対策を組織的に取り組もうとしていることがうかがえた。
- 問1の1)で「GAP認証済みあるいは取得中」の回答者は、①②③⑥⑨の項目において全体の実施率よりも10ポイント以上高かった。また、この後の5)で「BCPを設定している」回答者も、②③⑤⑥⑨で全体よりも10ポイント以上高く、⑦については100%の実施率であった。

3) 家族、作業スタッフの理解度について（複数回答可）

回答数 87

①分担している作業の内容や意味を <u>全員</u> が理解している	59.8%
②その日のお互いの作業場所や作業内容を <u>全員</u> が知っている	59.8%
③人はミスをすると言うことを自覚している	67.8%
④家族、作業スタッフの健康状態を把握している	70.1%
⑤その他	1.1%

「その他」の内容

- ・各部署にリーダーを置く制度を敷いている
- ・ライングループで情報共有している

- 「④健康状態の把握」が最も実施率が高かった。今後、健康状態を把握した上でどのような対応がなされているのかについて掘り下げる必要があると考えられた。
- 「①作業の内容や意味を全員が理解」、「②お互いの作業場所や内容を全員が知っている」についても約6割と高めの実施率ではあったが、農業法人でも一人作業の場面が少なくない現状を踏まえると、さらなる徹底が望まれた。
- 「③人はミスをするもの」が二番目に高かったが、農作業安全では最も重要な認識のうちの一つであることを鑑みると、その認識度が必ずしも高くはないと思われた。対策が単なる「気をつけましょう」で終わってしまわないためにも、啓発の際はこの点を強調する必要性が示唆された。
- 「その他」の内容として、部署毎に責任者を置く OSHMS（労働安全衛生マネジメントシステム）に近い体制をとっている回答者や、IT 技術を利用している回答者が見られた。
- GAP 認証と BCP 設置の両方に取り組んでいる回答者は、すべての項目で全体の実施率よりも10ポイント以上高く、④については100%の実施率であった。

4) 現場改善について（複数回答可）

回答数 77

①作業場所や作業方法に潜む危険の洗い出しを定期的に行い、改善を図っている	67.5%
②従業員のミスによるケガやヒヤリハットがあっても怒らず、報告書などにより <u>全員</u> で情報を共有して冷静に対策を検討している	63.6%
③事故の報告書から具体的な対策を導き出し、実践している	51.9%
④その他	2.6%

「その他」の内容

- ・報告書の作成

- 「①作業場所等に潜む危険の洗い出しを行っている」が最も実施率が高かった。その反面、「③事故報告書から具体的な対策を導き出している」の実施率はそれよりも低かった。この理由として、事故やヒヤリハット事例を文書として記録していないこと、文書化していても事故やヒヤリハット事例から要因を抽出できていないこと、が考えられた。事故報告書の作成過程で、要因として人為的ミスしか抽出できなかったというのはありがちなケースであり、その場合、注意喚起以外に具体的な対策を導き出すことはできない。本来、作業場所に潜む危険を適切に洗い出すことができているのであれば、事故報告書からも具体的な対策が導き出せるはずである。このことから、今後、的確な要因抽出とリスクレベルに応じた対策を導出するリスクアセスメントのスキル向上を図るための

研修が必要であることが示唆された。

- 「②ミスがあっても怒らずに情報を共有し、対策を検討する」については、事故要因の洗い出しに不可欠な姿勢であり、ともすると要因究明よりも責任追及に陥りがちになることが多いことから、啓発ではこの点についても強調する必要があると考えられた。
- BCP を設置している回答者は、②③の項目で全体の実施率よりも 10 ポイント以上高く、GAP 認証と BCP 設置の両方を実施している回答者は、すべての項目で高く、③については 100%の実施率であった。

5) 事故が発生したときに備えて行っていることについて (複数回答可)

回答数 87

①救命措置の方法や緊急連絡先等、事故が起こった際にとるべき措置を <u>全員</u> が知っている	42.5%
②労災保険に加入している	97.7%
③労災保険以外の損害保険や生命保険に加入している	63.2%
④AED を設置し、 <u>全員</u> がその場所や使い方を知っている	3.4%
⑤BCP (事業継続計画) を設定している	19.5%
⑥その他	0%

- 「②労災保険への加入」が 100%に満たなかった。法人経営では加入義務があることから、一層の加入促進を図ることが必要と考えられた。
- 「①救急措置を全員が知っている」を実施している回答者は半数に及ばなかった。また、「④AED の設置」はごくわずか (3 件) だった。AED の操作方法も含め、消防署に講習を依頼できることを情報発信する必要があることが示唆された。
- 「⑤BCP の設定」を実施している回答者が約 2 割を占めていることから、このアンケート回答者は比較的リスク管理への関心が高いものとうかがわれた。
- GAP 認証の回答者は、①が 80.6%と全体の約 2 倍であり、②は 100%の実施率であった。

問 2. 農業機械や器具に関して、農場で取り組んでいることについて該当するもの全てを選択してください。

1) 農業機械や器具全体について (複数回答可)

回答数 87

①日常点検・定期点検を行っており、異常が見つかった場合は使用を中止し、速やかに修理している	82.8%
②取扱説明書の保管場所を決めており、 <u>全員</u> がその場所を知っている	54.0%
③機械の点検・修理・清掃を行う際は、原則としてエンジンを切っている	96.6%
④脚立やはしご等の正しい使い方を <u>全員</u> が知っており、励行している	54.0%
⑤刈払機の正しい作業方法を <u>全員</u> が知っており、励行している	75.9%
⑥農業機械を購入する際は、性能や価格に加え、安全性が高いと思われるものを選ぶようにしている	56.3%
⑦稼働中の農業機械には近づかないこととし、子供や近所の住人を近づけさせないように配慮している	75.9%
⑧作業中に機械に異物が詰まったりしたときは、急いでいても必ず動力を切ってから取り除いている	86.2%
⑨その他	0%

- 「③機械の点検等でのエンジン停止」や「⑧作業中の異物混入時でのエンジン停止」、および「①異常発見時の使用中止と即時修理」の実施率が高いことから、機械使用時の危険に対する認識が高いことがうかがわれた。その反面、「②取扱説明書の保管場所」、「⑥機械選定条件としての安全性」に対してはさして高い実施率とは言えなかった。
- 「④脚立やハシゴの正しい使い方」への認識は不十分と思われた。また、「⑤刈払機の正しい作業法を全員が知っている」についても、法人経営では業務として刈払機による作業を行うことになるため、講習をさせる義務があることから、一層の促進を図るため、今後の啓発でポイントとすべき内容であると思われた。
- GAP 認証の回答者は②④⑥で、BCP 設置の回答者は③④⑥（うち③は 100%）、両方を実施している回答者は①～⑥（うち①と③が 100%）で全体の実施率よりも 10 ポイント以上高かった。

2) 乗用トラクターについて（複数回答可）

回答数 79

①使っているトラクターの全てに安全キャブ・フレームが付いている	77.2%
②低速車マークや反射板を付けている	60.8%
③装着する作業機は、公道走行に必要な灯火や表示等の要件を満たしている	63.3%
④乗降は機体左側から行っている	64.6%
⑤ほ場内で作業しているとき、シートベルトを着用している	16.5%
⑥路上走行するとき、シートベルトを着用している	26.6%
⑦路上走行する際は、必ず左右のブレーキペダルの連結を確認している	83.5%
⑧重い作業機を装着したときや傾斜地作業を行う際は、車輪が浮かないようにバランスウェイトを装着している	62.0%
⑨任意保険をかけている	70.9%
⑩車検を通している	12.7%
⑪その他	0%

- 「⑦路上走行時の左右ブレーキ連結確認」、「①使用するすべてのトラクターへの安全キャブ・フレーム装着」、「⑨任意保険への加入」の実施率が高く、乗用トラクターの死亡事故が最も多いことが認識されていることがうかがわれた。
- 「②低速車マークの装備」、「③公道走行に必要な作業機の要件」、「④機体左側からの乗降」については、さらなる徹底が必要であると思われた。「⑧バランスウェイトの装着」については、該当しない回答者も含まれると思われるため、さらに確認が必要である。
- 「⑤作業中のシートベルト装着」と「⑥路上走行中のシートベルト着用」がともに 2 割前後と低かった。安全への関心が高いと思われる回答者層でさえ、このレベルであることから一層の啓発が必要であることが示唆された。2 点式シートベルトは身体をシートに固定したままとするため、後方を確認しながらの作業がやりにくくなる等の難点がある。海外製トラクターでは、ロックを外すとシートが横方向に回転する機能を持つものもある。また、自動車のシートベルトは姿勢に合わせて伸縮するが、衝撃がかかるとロックする構造になっている。路上、作業中いずれについてもシートベルト着用率を向上するには、啓発だけではなく、こういった機能を国内製トラクターにも導入するといった技術的な対策を検討することも必要と考えられた。
- GAP 認証の回答者は④⑥⑨で、BCP 設置の回答者は①～⑥で全体の実施率よりも 10 ポイント以上高かった。両方を実施している回答者は①～④⑥⑨（うち③と④が 100%）で全体よりも 10 ポイント以上高かった反面、⑤⑧では全体よりも 10 ポイント以上低い（⑤は 0%）という意外な結果であ

った。

3) 乗用の農業機械（乗用トラクターも含む）について（複数回答可）

回答数 83

①農業機械に乗り降りする際は、身体を機体に向けてハシゴ乗り・ハシゴ降りしている	61.4%
②農業機械の運転前には、機体の周りを一周し、機体や周囲に危険がないか確認している	44.6%
③農業機械で路上走行するときは、できるだけ一般車の交通量が少ない道を選んでいる	84.3%
④ほ場や通路の大きさ・傾斜・幅などに応じて、使う農業機械を制限している	43.4%
⑤周囲に高低差があるほ場では、ほ場端より十分に内側に寄って作業することになっている	39.8%
⑥路上走行するときは、路肩に近づき過ぎないようにしている	65.1%
⑦畦畔などの段差を乗り越える際は、畦畔等に対して直角になるようにして行っている	69.9%
⑧その他	0%

- 「③交通量の少ない経路を選ぶ」を実践している回答者が8割以上と多かった。追突のリスク回避もさることながら、行列をなす後続車からのプレッシャーや無理な追い越しによる危険にさらされていることがうかがわれた。
- 「⑥路上走行では路肩に近づきすぎない」との回答が65.1%だった反面、「⑤段差があるほ場内では端から十分内側で作業する」との回答は39.8%にとどまった。段差があるほ場は一筆面積が狭いことが多いと考えられ、耕作面積を少しでも稼ぎたいとの意図があるものと考えられた。
- 「④ほ場や通路の大きさ等に応じて使用する機械を制限している」との回答も43.3%にとどまった。農機を選定する際には最も多い大きさのほ場での作業性を考慮すると思われ、受託作業等で一部に狭小なほ場が含まれていると、農機と作業環境にミスマッチが生じる。ほ場の大きさに応じて、サイズ違いの機械を買い揃えるのは非現実的であることから、土地改良事業の際に機械作業や管理作業の安全性を確保する視点も含めた計画検討が必要と思われた。
- 安全への意識が高い回答者層であっても、「①ハシゴ乗り・ハシゴ降りの励行」は61.4%にとどまった。乗用農機の大型化も相まって乗降時の転落によるケガは多く、重傷率も高いことから、今後の啓発で強調すべきポイントの一つであると思われた。
- 「②運転前の機体の周囲確認」も44.6%にとどまっており、ハシゴ降りとともに一連の正しい操作方法として啓発が必要と考えられた。
- GAP認証の回答者は②⑤⑥で、BCP設置の回答者は①⑤⑥で、両方を実施している回答者は①～⑤（うち③が100%）で全体の実施率よりも10ポイント以上高かった。

問3. 畜産農家の皆さんに伺います。家畜の扱いに関して、農場で取り組んでいることについて、該当するもの全てを選択してください。

回答数 9

①家畜の扱いに対する基本事項・基本行動・性質を <u>全員</u> が知っている	88.9%
②家畜の性質を <u>全員</u> が理解し、適切な関係で接している	77.8%
③家畜をたたいたり、おどしたり、大きな音や声で恐怖心を与えていない	77.8%
④家畜の真後ろから近づくなど、死角には入り込まない	33.3%
⑤家畜の個人情報（生育状況、健康状態、発情・受胎等）を農場全体で共有している	33.3%
⑥家畜の健康と生産性を両立できる飼養管理技術の実践を心がけている	88.9%
⑦家畜にできるだけストレスを与えないよう、畜舎の環境を整えている	100%
⑧その他	0%

- 回答者数は9件と少なかったが、すべての回答者が「⑦家畜へのストレス軽減のために畜舎環境を整える」を実施しており、8件が「①家畜の扱い方等を全員が知っている」、「⑥家畜の健康と生産性の両立を目指している」と回答し、7件が「②家畜の性質を全員が理解」、「③家畜に恐怖心を与えない」と回答していることから、カウコンフォートへの意識が高い層であることがうかがわれた。
- 「④家畜の死角に入り込まない」、「⑤個人情報を共有する」については3件にとどまった。後者については、疾病の早期発見や繁殖成績の向上にも関係し、経営者等だけに頼らずに全員で共有して見落とさないことが重要であることから、酪農畜産農家への啓発では強調すべきポイントの一つであると思われた。

問4. 作業場所に関して、農場で取り組んでいることについて、該当するもの全てを選択してください。

1) 作業場・畜舎での作業性について（複数回答可）

回答数 76

①道具や器具、薬品等を分かりやすく、使いやすい場所に整理し、使ったら必ず元の場所に戻している	94.7%
②効率の良い作業動線の組み立てができている	52.6%
③作業場所や通路等を定期的に清掃し、常に清潔を心がけている	86.8%
④きつい姿勢での作業が緩和されるよう、作業場所を改善している	65.8%
⑤作業場所や通路の段差をなくす、滑りやすい場所に滑り止めを付ける、バランスを崩しやすい場所に手すりを設ける等の改善をしている	38.2%
⑥高所作業を行う場所に、足場、階段、手すり、リフター等の昇降設備を設けている	26.3%
⑦通路や施設、建物にある改善しにくい危険箇所には、目立つ目印を付けて注意喚起している	48.7%
⑧その他	1.3%

「その他」の内容

・ GLOBAL GAP に準じて作業している

- ①や③といった5S（整理・整頓・清掃・清潔・躰）に関する実施率が高かったが、これはGAPに取り組んでいる回答者が多く含まれているためであると考えられた。「その他」で「GLOBAL GAPに準じて作業している」との回答もあった。
- 「②効率の良い作業動線の確保」については、52.6%の回答にとどまった。5Sの実施率の高さに及ば

なかったのは、作業場所の広さや配置などの条件に制限されている場合が多いためと考えられたが、ここを改善できれば安全性だけでなく、生産性の向上も図れることから、啓発で強調すべきポイントの一つと考えられた。

- 「⑤作業場所や通路の改善」、「⑥高所の危険箇所への改善」については、実施率が38.2%、26.3%と他の項目よりも低レベルであった。対策へのコストが懸念されているのが理由とも考えられるが、低コストで対応可能な「⑦改善しにくい箇所への目印」の実施も48.7%と半数に満たなかった。馴れた作業場であり、先入観によって危険箇所に十分に気付けていないことも考えられることから、KYT（危険予知トレーニング）の推奨により、正しくリスクアセスメントが実施できるようにスキルアップを促す取組が必要と考えられた。
- GAP 認証の回答者は⑤⑦で、BCP 設置の回答者は②⑤～⑦で、両方を実施している回答者は②～⑦で全体の実施率よりも10ポイント以上高く、三者とも①が100%であった。

2) 作業場・畜舎の環境について（複数回答可）

回答数 75

①暑熱対策として、作業場所に適切な冷房を設置している	48.0%
②寒冷対策として、作業場所に適切な暖房を設置している	58.7%
③作業を行う施設や建物の内部には、適切な明るさを確保している	93.3%
④騒音が大きい作業場所には、壁に吸音材を設置するなど周囲への騒音低減対策を施している	14.7%
⑤粉じんの多い作業場所には、吸引ダクトを設置している	29.3%
⑥作業場所の近くに手洗場やトイレを整備している	82.7%
⑦その他	0%

- 「③適切な明るさ」や「⑥トイレの確保」については実施率が高かった。トイレの確保は労働衛生上、必須であり、ようやく他産業並みに近づきつつあることがうかがわれた。
- 「④騒音対策」や「⑤粉塵対策」についての実施率は低かった。理由としては、騒音が出ても周囲を気にしなくても良い環境である場合や、該当しない回答者が多いなども考えられるが、コスト面の問題も影響している可能性が考えられた。
- GAP 認証の回答者は①④で、BCP 設置の回答者および両方を実施している回答者は①②④で、全体の実施率よりも10ポイント以上高かった。

3) ほ場とその周辺について（複数回答可）

回答数 72

①農業機械での作業の安全を確保するため、段差・傾斜度・凹凸・幅などの改善を図っている	72.2%
②ほ場にある改善しにくい危険箇所には、目立つ目印を付けて注意喚起している	37.5%
③ほ場への進入路や農道では、周辺の草刈りを行うなど、見やすい状態にしている	90.3%
④長い法面での草刈り作業を安全に行うため、途中に小段を設けている	20.8%
⑤その他	0%

- 「③ほ場への進入路等の周辺の草刈り」の実施率は9割に達した。また、「①ほ場やその周辺の段差等の改善」も7割以上を占めた。室内作業場の改善については4割に満たなかったことに比べると、機械作業の危険性が作業環境にも起因していることがある程度、認識されていることがうかがわれた。

- 「②改善しにくい危険箇所への目印」への回答は4割に満たなかった。該当しない回答者が多かったためか、危険箇所に気付いていないためか、あるいは借地等であるために地権者の了解が得られない等の理由が考えられるが、改めて明らかにする必要がある。
- 「④長い法面への小段の設置」を実施している回答者は2割に過ぎなかった。土木工事が必要でコストがかかることや、借地の場合は地権者の了解が必要であること等、ハードルが高い項目であることがうかがわれた。
- GAP 認証の回答者は②で全体の実施率よりも10ポイント以上高かった。

問5. 作業者の保護や軽労化に関して、農場で取り組んでいることについて、該当するもの全てを選択してください。

1) 服装・保護具について（複数回答可）

回答数 84

①だぶつかず、タオルや紐を垂らさない、作業に適した服装を徹底している	75.0%
②必要に応じてヘルメットを着用している	58.3%
③安全靴・安全長靴を履いて作業している	31.0%
④滑りにくい靴を履いて作業している	66.7%
⑤刈払機での作業では、フェイスシールドやプロテクタ等、適切な保護具を装着している	47.6%
⑥農薬散布作業では、雨がっぱやゴーグル等、適切な保護具を身に付けている	58.3%
⑦騒音にさらされる作業では、耳栓やイヤーマフを付けるようにしている	21.4%
⑧粉塵にさらされる作業では、防じんマスクを付けるようにしている	46.4%
⑨薬剤を扱うときにはゴム手袋やゴーグルなどを付けるようにしている	64.3%
⑩その他	0%

- 「①作業に適した服装の徹底」が最も高い実施率だが75.0%にとどまった。安全に作業を行うための一丁目一番地であることから、100%を目指した啓発を行う必要がある。
- 「②必要に応じたヘルメットの着用」は58.3%と一般農家と比較すれば高いと言えるが、安全への関心が高い経営層であれば、さらなる徹底を期待したい。
- 「③安全靴の着用」についても31.0%と一般農家よりは高いと考えられるが、機械作業以外でも重量物を落とす等のリスクが考えられることから、100%に近づけるよう啓発に力を入れる必要がある。
- 「⑤刈払機での作業での保護具の着用」が47.6%にとどまっているが、労働安全衛生法の適用を受ける法人経営としては、該当しない回答者を差し引いてももう少し高い実施率であるべきと考えられることから、今後の啓発での最重要ポイントとすべきであろう。
- GAP 認証の回答者は①⑥⑨で、BCP 設置の回答者は①③～⑤で、両方を実施している回答者は②⑦以外（うち⑤が100%）で全体の実施率よりも10ポイント以上高かった。

2) 作業負荷の軽減について（複数回答可）

回答数 87

①重量物を取り扱う際は、できるだけ作業者に負担をかけないように台車を使うなど配慮している	80.5%
②一日の作業時間が8時間を超えないよう努めるとともに、定期的に休憩を取っている	89.7%
③腰を曲げる等のきつい姿勢が伴う作業では、こまめに休憩を取り、作業時間を制限している	59.8%
④体調が思わしくない者には、機械作業や負担の大きな作業を行わせないようにしている	73.6%
⑤熱中症対策として、こまめに休憩と水分補給を行い、少しでも不調がある者は作業を中止させるようにしている	88.5%
⑥その他	0%

- 作業負荷の軽減については、どれも概ね高い実施率を示しているが、「③きつい姿勢が伴う作業での作業時間の制限」については 59.8%と、この中では最も低かった。これとの関連性が強い問4の1)でも「④きつい姿勢での作業が緩和されるよう、作業場所を改善」が 65.8%にとどまっていることから、例えば重量野菜の収穫・運搬作業等、作業環境や作業時間の制限では解決しにくい課題が背景にあることが考えられ、こういった作業の機械化・省力化が望まれる。
- GAP 認証の回答者は④で、BCP 設置の回答者は①④で（うち①は 100%）、全体の実施率よりも 10 ポイント以上高かった。両方を実施している回答者は①③④で（うち①と④が 100%）全体の実施率よりも 10 ポイント以上高かった反面、②が 10 ポイント以上全体よりも低かった。

問6. 問1～5で取り組まれていない項目の理由について、該当するもの全てを選択してください。

回答数 82

①これまで大した事故は起きておらず、必要と感じていないため	28.0%
②具体的にどうしてよいか方法が分からないため	18.3%
③それに取り組まなければならない理由が分からないため	1.2%
④取り組んだ方がよい理由は分かるが、そこまでやる必要性を感じないため	40.2%
⑤取り組みたいが、時間がない	30.5%
⑥取り組みたいが、お金がない	18.3%
⑦その他	11.0%

「その他」の内容

- ・取り組んでいる
- ・該当するものがないため
- ・ルール作りの具体策が不明のものがある
- ・JGAP の認証取得の際、安全面での精査をしたから
- ・取り組みを検討している
- ・作業内容、作業量、作業する時期・期間でできることとできないことがあるので、各農場で一律に取り組めるものではない
- ・全職員が GLOBAL GAP 指導員の資格を取得している
- ・必要性は感じるが、ほ場管理責任者に任せきりになっていた

- 取り組まれていない理由として最も多かったのは「④取り組むべき理由は分かるが、そこまでやる必要性を感じない」で 40.2%を占めた。各設問の選択肢のほとんどは「農作業安全に関する指針」に記

載されている項目であることから、取り組むべき理由への理解が不十分であることがうかがわれた。

- 上記に関連して、「①これまで大した事故は起きていない」(28.0%)との回答者についても、「これまでは起きていないが、将来的に事故に繋がる可能性がある危険」を十分に洗い出せていないことがうかがわれた。
- 「②具体的にどうしてよいかわからない」が18.3%を占めているが、個別具体的な対策は農場ごとに異なり、正解がわかりにくいのも確かである。的確なリスクアセスメントを行うためには、ある程度の知識が必要であり、そうしたスキルを身に付ける機会を設けるとともに、教えられる人材を育成する必要があることが示唆された。
- 「その他」の内容で「ほ場管理責任者に任せっきりになっていた」という回答も上記と同根の問題であると思われた。
- 「⑤取り組みたいが時間がない」(30.5%)、「⑥取り組みたいがお金がない」(18.3%)については、安全対策に費やす時間や費用に対して、事故が及ぼすリスクへの理解が不十分であることが背景にあるものと考えられた。啓発の中で、農作業事故の経営に及ぼすリスクの大きさについて強く訴える必要がある。
- 「その他」の内容で「JGAPの認証取得の際、安全面での精査をしたから」、「全職員がGLOBAL GAP指導員の資格を取得している」との回答があったが、本来のリスクアセスメントができていれば、問1～5に挙げた各項目の実施率はもっと高くなるものと考えられた。それだけGAPへの信頼が高いということは一面では喜ばしいことだが、思考停止に陥っているとすれば、かえって危険である。GAP指導員の農作業安全に関する指導スキルの一層の向上を図る必要性が示唆された。

問7. あなたの農場で事故を起こさないためには何が必要で、具体的にどのような対策をとったらいいのか、農作業安全の専門家に直接、アドバイスがもらえる制度があったら利用したいですか？

回答数 87

①有料でも利用したい	4.6%
②価格が適正だったら利用したい	24.1%
③無料ならば利用したい	35.6%
④GAP指導員等からのアドバイスで十分	12.6%
⑤自治体やJA等の安全研修会に参加して、気をつけて作業するようにしているので必要ない	13.8%
⑥自分で判断するので、アドバイスは特に必要ない	9.2%

- 農作業安全への関心が高いと思われる回答者層であっても、労働安全コンサルタントによるアドバイスへの要望は概して高いものではなかった。「③無料ならば利用したい」と考える回答者でさえ35.6%にとどまった。他産業における労働安全のレベルに対する農作業安全のレベルの低さへの認知度が低いことが背景にあるものと考えられた。
- 「④GAP指導員等からのアドバイスで十分」(12.6%)との回答は、問6の「その他」でも見られたようにGAP指導員への信頼の厚さを示したものと理解されるが、一方でGAP指導員のアドバイスだけに頼り過ぎてしまうようになると、自主的な危険の洗い出しや対策の検討がおろそかになることが懸念された。
- 「⑤自治体やJA等の安全研修会に参加して、気をつけて作業するようにしているので必要ない」が13.8%を占めた。研修会を受けただけで、気をつけていれば十分という気になってしまうのはかえって危険である。こうした研修会では、単に注意喚起するだけでなく、具体的な対策やその検討方法についても触れる必要があることが示唆された。また、単に情報を伝えるだけでなく、農場が安全対策

を実践できるようにサポートが必要と考えられた。

- 「⑥自分で判断するので、アドバイスは特に必要ない」との回答も 9.2%と少数ながらも存在することに危惧を抱かざるを得ない。農作業事故のリスクは多くの人々が考えているよりもはるかに大きいことを強調すべきと考える。

問8. 問7で「①有料でも利用したい」または「②価格が適正だったら利用したい」とお答えになった方に伺います。あなたにとっての1回当たりの適正価格の上限値はいくらですか？

回答数 25

① 2万円以下	60.0%
② 4万円以下	24.0%
③ 6万円以下	12.0%
④ 8万円以下	0%
⑤ 8万円より高くてもよい	4.0%

- 金額の安い順に回答率が高く、「2万円以下」が 60.0%を占めた一方で、「8万円より高くてもよい」との回答が 4.0%（1件）あった。たった1件であっても、一条の光を見る思いである。
- 労働安全コンサルタントによるアドバイスに対する金銭的価値が正しく認識されていないことに加えて、農作業安全にかかる費用は投資ではなく、収益の向上に結びつかないコストであるとの認識がまだまだ根強いものと思われた。

問9. 安全性検査、型式検査、安全鑑定の合格証票／適合証票を見たことがありますか？（複数回答可）

回答数 87

①安全性検査の合格証票を見たことがある	11.5%
②型式検査の合格証票を見たことがある	56.3%
③安全鑑定の適合証票を見たことがある	41.4%
④いずれも見た覚えがない	37.9%

- 安全性検査は開始から4年しか経っておらず、歴史が浅いことから型式検査や安全鑑定より認知度が低いのは仕方がない結果であった。
- 「④いずれも見た覚えがない」との回答が 37.9%あった。安全性検査の受検率の向上を図るためには、エンドユーザーである農業者に対しても検査制度についての PR を積極的に行う必要性が示唆された。

問10. 問9で①②③と回答された方に伺います。これらの証票をどこでご覧になりましたか？（複数回答可）

回答数 54

①農業機械に貼ってあったのを見た	98.1%
②農研機構のウェブサイトを見た	13.0%
③その他	0%

- 「①農業機械に貼ってあったのを見た」のがほとんどを占めるのは当然として、少ないながらも「②ウェブサイトを見た」との回答も13.0%あったことから、検査制度の認知度向上に向けて、インターネットによる情報発信は一定の効果が期待できることが示唆された。

問11. 安全性検査、型式検査、安全鑑定の制度の内容をご存じですか？（複数回答可）

回答数 85

①安全性検査の制度内容を知っている	4.7%
②型式検査は、乗用トラクター等の主要機種のパフォーマンスと安全機能の確認を行う制度であることを知っている	34.1%
③安全鑑定は、全ての機種のパフォーマンス・要件の確認を行う制度であることを知っている	17.6%
④いずれも知らない	64.7%

- 「④いずれも知らない」が64.7%と最も多かったのは致し方ない結果であるが、型式検査や安全鑑定について一定数の理解も見られた。むしろ、歴史の浅い安全性検査の制度内容を知っている回答者が4.7%（4件）いることを喜ぶたい。

問12. 安全性検査について、あなたのお考えに最も近いもの一つをお選びください。

回答数 86

①安全・安心な農業機械が増えて欲しいので、安全性検査を義務化した方がよい	30.2%
②農業機械の安全性は大事だが、義務化するまでは必要なく、今のままの任意受検でよい	37.2%
③農業機械の安全性はメーカーに任せればよく、公的な検査は必要ない	18.6%
④分からない	12.8%
⑤その他	1.2%

「その他」の内容

・安全性検査を義務化した方がよいと思うが、それに係るコストを農家だけに負担させることには疑問がある

- 「②義務化するまでの必要はない」との意見が37.2%と最も多く、次いで「①義務化した方がよい」が30.2%、「③公的な検査は不要」も18.6%あった。
- 「その他」の内容として、義務化には賛成するが農家へのコストのしわ寄せには反対する声が見られた。検査費用の製品価格への影響はほとんどないと考えられるが、検査に合格するために必要な安全対策にかかる費用は製品価格に影響を与える可能性がある。これは安全性検査があるから製品価格が高くなったのではなく、本来は必要な安全対策を削って製品価格を下げているという認識が正しいはずである。これも農業という業界の安全意識のレベルが他産業に比べて低いことの表れであると考えられた。

問13. 安全性検査について、今後のご要望があればお聞かせください。(複数回答可)

回答数 82

①検査合格機を使いたい、機種や型式が限られているので農機メーカーに受検を働きかけてほしい	24.4%
②安全性を高めるため、基準をもっと厳しくした方がよい	7.3%
③合格機は、損害保険の割引対象や融資の優遇措置の対象にしてほしい	51.2%
④合否判定だけでなく、機種ごとに安全性、性能、取扱性などを評価して発表し、購入時の選定の参考になるようにしてほしい	51.2%
⑤その他	6.1%
⑥特にない	1.2%

「その他」の内容

- ・安全性については第三者による検査も悪くはないですが、作業者の教育の方が重要と思います。不適切な方法、無茶苦茶な方法で使っている者の方がリスクです。ここを改善せずして検査にコストをかけるのは根本的な解決策にはならないと思います。
- ・購入価格が変わらないのであれば、安全性の高いものを使用したい。
- ・わからない。
- ・必要になるだろう、と思うが、生産者の負担増、コスト高は?。
- ・安全性より操作性が高い方が事故が無い。

- 「③損害保険の割引対象や融資の優遇措置の対象にしてほしい」と「④安全性、性能、取扱性などを評価して発表し、購入時の選定の参考になるようにしてほしい」がいずれも 51.2%と最も多かった。
- 「①検査合格機を使いたい、機種や型式が限られているので農機メーカーに受検を働きかけてほしい」は二番目に多い24.4%であった。「②基準をもっと厳しくした方がよい」も 7.3%あった。
- 「その他」の内容としては、機械の安全性向上だけでなく、作業者の教育の必要性を訴える意見や、検査の必要性を認めつつも、そのコストのしわ寄せがユーザーに来ることを懸念する声などが見られた。

問14. 農業機械を購入されるときの条件について、あなたのお考えに最も近いもの一つをお選びください。

回答数 83

①性能・機能が同等ならば、多少、価格が高くても安全性が高いと思われる方を買う	18.1%
②値段・性能・機能が同等ならば、安全性が高いと思われる方を買う	73.5%
③購入条件として安全性は重視しない、あるいは考慮に入れていない	6.0%
④その他	2.4%

「その他」の内容

- ・もっとも作業に適したものを選定し、価格は二の次
- ・基準によりけりなので、価格との比較は一概には言えない

- 「②値段・性能・機能が同等ならば、安全性が高いと思われる方を買う」が 73.5%と大勢を占め、「①多少、価格が高くても安全性が高いと思われる方を買う」は 18.1%であった。
- 「③購入条件として安全性は重視しない」も 6.0% (5件) あった。
- 「その他」の内容として、作業への適応性などを挙げる意見も見られた。

問15. 問14で①または②と回答された方に伺います。安全性をどのようにして判断していますか？（複数回答可）

回答数 77

①安全性検査等の証票を見て判断している	16.9%
②安全装置・装備の有無で判断している	58.4%
③友人やサービスマンから聞いた話で判断している	57.1%
④その他	1.3%

「その他」の内容

・ホームページやメーカーのカタログ

- 「②安全装置・装備の有無」、「③サービスマン等から聞いた話」が半数以上を占め、「①合格証票」は16.9%にとどまった。
- 「その他」として、ホームページに掲載されている情報を基に判断しているとの意見があったことから、各メーカーには安全装備についての情報（装備されている理由や機能など）を積極的に掲載していただくよう呼びかける必要性が示唆された。

問16. 農業機械の安全性について、あなたのご意見に最も近いもの一つをお選びください。

回答数 86

①農業機械は他産業の機械に比べて安全性が低く、全般的にレベルアップが必要	17.4%
②新しい農業機械でも、機械の種類や型式によっては安全性が不十分なものがあるので改善してほしい	9.3%
③新しい農業機械の安全性については、おおむね満足している	46.5%
④農業機械の安全性については、あまり気にしていない	8.1%
⑤よく分からない	7.0%
⑥その他	11.6%

「その他」の内容

- ・農道を低くすれば、安全性が高まる。
- ・全体的に作業者のレベルアップが必要。機械の安全性能がレベルアップしても作業者のレベルが低ければ同じ。また生産者が高齢過ぎるもの一因では、自動車免許のように年齢的な使用制限などあれば予防できる事故もあると思います。
- ・農業機械の安全性が高くなっても、結局は操作する人が安全に対しての高い意識を持つことの方が大事になってくると思います。身も蓋もない意見ですが。
- ・安全性とコスト高は比例するイメージがある。安全、コスト、能率のバランスが大切。
- ・安全性もだが、故障が多くてより安全性を低くしている。
- ・機械そのものの安全性よりも、使用する人間の安全な使い方が出来ているかの方が重要。
- ・農業機械以外の物を使用することが多い。
- ・農道を低くする。機械より農地を整備すれば安全になると思う。
- ・自分自身を含めてユーザーがよく理解すべき。機械の新旧に関わらず気をつけていれば回避できる事がほとんどだと思う。

- 最も多かったのは「新しい農業機械の安全性については、おおむね満足」で 46.5%を占め、「全般的にレベルアップが必要」が二番目に多く 17.4%、さらに続いて「新しい機械でも安全性が不十分なものがあるので改善してほしい」が 9.3%であった。使用している機種の違いが、評価が分かれた要因のひとつとなっているものと考えられる。
- 安全への意識が高いと思われる回答者層にも「農業機械の安全性については、あまり気にしていない」(8.1%)とする層が存在することから、家族経営も含めた農業者全般では、農業機械の安全性に無頓着な層ではもっと多いことが推測される。
- 「その他」の内容として、作業者の安全意識の向上に関する意見が4件、作業環境の改善に関する意見が2件、コストアップを懸念する意見と耐久性向上に関する意見が各1件あった。

問17. 問16で②と回答された方に伺います。新しくても安全性が不十分と思われた農業機械の機種を以下の中からお選びいただき、その具体的な内容についてお聞かせください。

- | | | | |
|--------------|----------------------|------------|------------|
| ①乗用トラクター | ②歩行用トラクター（管理機又は耕うん機） | ③田植機 | |
| ④自脱コンバイン | ⑤普通コンバイン | ⑥播種機 | ⑦ブロードキャスター |
| ⑧マニュアルスプレッダー | ⑨エンジンハーベスター | ⑩ポテトハーベスター | |
| ⑪コーンハーベスター | ⑫ロールベアラー | ⑬モア | ⑭刈払機 |
| ⑮その他 | | | |

- | | |
|-----------|-----------------------------|
| ①乗用トラクター | 半装軌式トラクターのステップが斜め（になっている） |
| ②歩行用トラクター | 乾土の耕うん時に急発進がある。ギアとかで対策できないか |
| ⑮ドローン | — |

- 回答があったのは半装軌式トラクターと歩行用トラクターの2機種だけであった。このうち、歩行用トラクターのダッシング対策への要望については、少なくともそういったヒヤリハットの経験に基づくものと推察され、何らかの対策の必要性が示唆された。

問18. 農作業の安全についてのご意見・ご要望があれば何でもお聞かせください。

・農業機械の使用に際し、法的義務まで言わないが製造メーカーなり販売業者が性能や運転操作操縦方法を2年に1回ぐらい教えるようにしてほしい。取扱説明書ぐらいでの使用であり、正に危険きわまりないと思う。

- 農業機械の使い方は見よう見まねで覚えていることがほとんどであると考えられ、それが事故要因のひとつとなっていることから、正しい操作方法を身に付けられる機会を設ける必要があると考えられた。地域内で農機販売店や農大校等を含めた関係機関で連携をとり、そうした機会を設ける取組が必要と示唆された。